

教育現場の“今”を、
保護者にどう伝えるか？

子どもたちは“未来からの留学生” 予測不能な未来に必要な力とは？

香里ヌヴェール学院 (大阪・私立)
学院長

石川一郎

いしかわ・いちろう●1962年東京都出身。早稲田大学教育学部社会科地理歴史専修卒業。暁星国際学園、ロサンゼルスインターナショナルスクールなどで教鞭を執り、2006年かえつ有明中・高等学校に教頭として着任。2015年同校校長を経て、2017年より香里ヌヴェール学院学院長に就任。2011年に教員の研究組織「21世紀型教育を創る会(現・21世紀型教育機構)」を幹事として立ち上げた。

2020年の大学入学共通テストに向け、学校現場では既にさまざまな取り組みが始まっていると思います。この4月には新テスト1期生となる生徒たちが入学。変わり行く教育環境について保護者にも理解してもらうために、学校からどうメッセージを伝えていけばよいのでしょうか。香里ヌヴェール学院の学院長を務める石川一郎先生に語っていただきました。

取材・文／長島佳子 撮影／西山俊哉

どうして入試が変わるのか 社会の背景から説明を

2020年からの大学入学共通テストの実施が目前に迫ってきています。昨年11月には試行調査(プレテスト)が実施され、大学入学共通テストがどのような問題になるかの方向性が明らかになってきました。それに先駆け、既に私立大学や国公立大学の二次試験では、正解が一つではない入試が実践され始めています。こうした変革に対し、学校現場でもさまざまな分析対策が始まっていると思いますが、新しい入試のパターンは実は一つなのです。

それは「あなたは どう思いますか？それはなぜですか？」ということが求められていることです。

小論文や面接を除いては、一問一答式の入試しか経験のない保護者の方々にこのように説明すると、驚かれるかもしれません。しかし現実はそのようなのです。

入試がなぜこのように変わるかといえば、社会では急速なAI化やグローバル化が進み、生徒たちは正解のない予測不能な未来へ羽ばたかなければならないからです。正解がない社会を生き抜くためには、「自分はどう思うか」という「自分軸」での思考ができ、

その根拠とともに他者に説明できる表現力が必要不可欠となります。欧米の教育では普通に問われる、「I think...because...」(私は〜と考えます。なぜなら…)という思考と表現です。それを、自分の意見とは異なる仲間と共有して共に考え、正解が一つではない問いに対して、最適な答えを導き出す力が求められているのです。文部科学省が掲げる新しい学力の3要素「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」のことです。「新しい」と言っても今までなかったことではなく、「本質的な学び」や「普遍的な力」と言えるでしょう。

そのため、社会への入口である大学が変わり、大学へ入るための入試が変わるのです。必然的に高校校での教育も変わらざるを得ません。保護者の方々、特に2020年の新テスト1期生に当たるこの4月に入学してくる新1年生の保護者の中には、「なぜよりよつてわが子の大学入試の年に」と不安に思われている方も多いと思います。保護者の方々の不安を取り除き、学

校が目指そうとしている教育について理解いただくには、社会背景や高大接続の三位一体の改革についても知っていただく必要があります。

「体験のないものに対し、どれだけ想像力をもてるか」

保護者に教育改革の説明をするにあたって、今の保護者はどんな人たちなのかを知っておくといと思います。私は私立の一貫校に携わってきましたが、保護者は大まかに3つの層に分かれていると考えています。

一つは、今の小学生の保護者世代の35歳前後、自身の文化形成が平成世代で、小学校から受験しているような方々です。勤務先の選択の際に、日本企業か外資系であるかは問わず、出身校ではなく「何ができるか」で採用されてきた人たちです。仕事で英語を使うことが当たり前で、実力本位のプロジェクトベースの仕事をしているケースが多いです。この層は今の教育に対しても感度が高いですが、数としてはひと握りです。

二つ目は、世代としてはもう少し上で、今の中高生の保護者世代で日本企業の中でも海外進出をしているような企業にお勤めの方々です。自身とその親の世代は、日本が右肩上がりの成長を遂げてきた昭和の時代を経験、あるいは学生時代に目にしており、努力や忍耐をすれば報われるという体験をしています。世の中の変化に対して教育改革の必要性は理屈ではわかっているものの、本能では自身の生きてきた時代のやり方を肯定してしまうという層です。

三つ目は世代や生きてきた背景は二つ目の保護者と同様ですが、ドメスティックな企業などにお勤めで、これから子どもたちが生きていく時代の変化や教育改革の必要性がまだ理解

できていない層です。地域性などもあると思いますが、高校生の保護者ではこの層が大半で、教員にも多いのがこの層ではないかと私は感じています。

つまり、我々教員自身も保護者も「体験のないもの」に対し、どのように想像力を働かせるかが、保護者に教育改革を伝える際に大切になってくるのです。慶應のSFCでは学生を「未来からの留学生」と位置づけているのですが、まさにその通りです。子どもたちを未来からの留学生と捉え、未来を生き抜ける力を育むために、未来社会をイメージし、その社会を生きる人として子どもたちに何が必要かを保護者に一緒に考えてもらうのです。

「あなたならどう思いますか？」 新しい学びではなく、本質的な学びが問われる

未来を生きる上で大切な3つのポイント

- 1 **今の世の中を知っている**
未来は現在の延長であるため、未来をイメージしてこれからの社会に向き合うためには、今がどんな世の中で、何が起きているかの知識が必要。今まで通りの知識の習得は継続して重要。
- 2 **自分と違う考えに出会う**
自分一人の知識や考えには限界がある。見識をひろげ、複眼的な視点をもつためにも、多様な人のもの見方や考え方に触れる必要がある。AL型授業はその意味でも有効。
- 3 **自分を知る**
正解のない問いに対して、自分軸で自分なりの答えを導くために、①と②を踏まえたうえで、「自分は何者なのか」「自分は何がしたいのか」と、自分をつきつめていくことが求められる。

保護者や生徒、教員に対して、教育改革について説明する際に、石川先生が前提として語っているポイント。正解のない未来を生き抜くには「自分軸」をもつことが重要だが、自分勝手な軸ではなく、社会の状況や他者の考えを知ったうえで「自分とは何か」を導き出すことの大切さを述べている。

「10年後の未来はどうなっているか?」と保護者にも問うてみる

正解のない問いについて 保護者に体験してもらう

私は学校説明会などで、「10年後の未来はどうなっていると思いますか? 子どもにはどうなっていてほしいですか?」と保護者に投げかけて、まわりの方とも話しながら考えてもらっています。アクティブラーニング(以下AL)の保護者会版です。すると「想像もつかない」という声や、さまざま考えが出てきます。もちろん正解はありません。しかし自分なりの答えは出さなくてはなりません。そしてこのとき保護者の方々が体験しているような思考の過程が、これから子どもたちを待ち受けている学びなのだと感じてもらおうのです。

①今の世の中を知ること

未来は現在の延長であるため、未来を想像するには、今がどんな世の中で、何が起きているかの知識が必要で

②自分と違う考え方に会おうこと

自分一人の知識や考えには限界があるため、さまざまな人のものの方や考え方に触れて、思考の幅を広げることです。

③自分を知らること

①と②を踏まえたうえで、「自分は何者なのか」「自分は何がしたいのか」と、自分をつぎつめたときに、初めて自分軸が見えてきます。

新しい入試やこれからの社会と向き合っていくためにも、この3つのポイントが重要になります。

校長は生徒や先生方にも直接教育方針を伝えることができるので、その際も、同様の手法でこの3つの話をしています。すると、それまで「なぜ入試が変わってしまったんだ」という雰囲気だった生徒や教員たちの、潮目が変わる瞬間が出てくるのです。

知識の「習得」から「活用」へ 授業形式は多様になっていく

正解のない問いについて考えること



は、入試としては我々教員や保護者が体験したことがなくても、普段の実生活、言うなれば人生そのものではないでしょうか。例えば教員にとって「どんなクラスをつくっていくか」ということもそうですし、家庭での子育ても同様です。世の中は正解のない問いの連続であるのに、学校現場の勉強だけが、一つの答えを導く場だったのです。

今までは知識の「習得」に重きを置かれてきましたが、これからは得た知識で自分はどう考えるのかという知識の「活用」が重要になってきます。知識を活用させるために、先ほどのポイントの②の、異なる考えとの出会いが必要となってきます。自分とは違う多様な考え方に触れたときに、「なぜ

違うのか」「自分はなぜこう考えたのか」思考を深めていくからです。こうした多様性との出会いや思考を深める手法として、AL型授業が有効なのです。

AL型授業は話し合いや発表などの形式が先行してしまうと、予定調和になりがちですが、本来の目的は生徒たちが思考することです。大切なのは形式ではなく、いかに本質的な「問い」をたてられるかです。正解がなく、生徒によって意見が分かれやすい「問い」であるべきなのに、教員が勝手に正解をイメージしてそこに導こうとする問いや授業進行では無理が生じます。また、今までの講義型の授業と異なる形式であることで、負担感や不



2020年を見据えた石川先生の著書
2020年からの教育改革に対して、何がどう変わるのか、教員はどう変わることが求められているのかをわかりやすく示している。



『2020年の大学入試問題』
(講談社現代新書)



『2020年からの教師問題』
(ベスト新書)

安を感じる先生方もいます。しかし、他者と意見を交わし、根拠を述べるAI型授業の大前提として、知識の裏付けが欠かせません。知識を得るための講義型の授業も今まで同様に必要なのです。

ただし、現在でも先人の膨大な知識はインターネットにあふれており、丸暗記しなくてもスマホで検索すれば知識は簡単に得られる時代です。検索できる知識の習得はさほど重要ではなくなっていくことです。

教員と保護者は生徒の長所を伸ばすための共同支援者

保護者よりも若い年代の先生方にとつて、保護者と対峙するのは楽なことではないと思います。私自身、30代の頃までは保護者会は辛く、できれば早く終わってほしいと思っていました。40代になってようやく保護者と同じ視線で話せるようになり、50代でやっと楽になってきました。

若い先生にアドバイスするとすれば、生徒たちと長い時間、深く接してい

る事実を基に、生徒たちを理解していることを保護者に伝えられればよいと思います。そのうえで、生徒の良い面をどう伸ばしていったらよいかを一緒に考える姿勢を見せることだと思えます。

高校生にもなれば生徒たちは自分のことはわかっています。わかっているが思うようにいかないときもありますが、そこに教員や保護者の意向を押しつけて変えようとしても、本人が納得できる人生は送れません。思考力が必要とされている時代であるのに、大人の考えが入ってくるほど、自分で考えなくなるものです。昨今、過保護や過教育が増加傾向にあるように感じますが、それは生徒の自立や思考力の育成に反比例していきます。

「自分はどうしたいのか?」を生徒に問い続けることが役割

新テストへの移行や教育改革について、その過渡期の渦中にある我々教員が、保護者に正確に伝えていくことは容易ではないかもしれません。そもそ

も、未来とは予想が不可能なものです。保護者の時代とは大学の学部も比較にならないほど多様になっており、選択肢が広がった分、決めることが難しくなっている時代です。だからこそ、「普遍的な力」と「自分が何をしたいかを考える力」が必要で、そのことを保護者に伝えればよいのです。

例えば、生徒から「自分はどの大学(学部)がいいでしょうか?」と進路の相談をされたら、教員は答えを与えなくてもいいのです。その代わり「君はどう思っているの?」と思考を促すように問うてあげることです。進路指導とは志望校というゴールに向かって、どうしたらその学校に入れるかの手ほどきをすることと考えられていた時期もありますが、そもそも志望校選びがゴールではありません。そこで何を学び、社会でどう役立てるかです。ゴールが見えているという考えを取り払ってあげて、自分軸で進路を見つけられるよう「指導」ではなく「俯瞰して問い続けてあげる」ことが、今の教員に求められていることだと思えます。それは保護者も同じです。

学びについても、進路についても、生徒が自分で考える力を育てるよう、教員と保護者が協働できる関係性を築いていけるとよいのではないのでしょうか。

大人の考えが入ってくるほど、子どもたちは自分で考えなくなる